

# 歴史と景観と道を活かしたまちづくり

## —「天領江津本町いらか薨街道」—

島根県江津市都市計画課

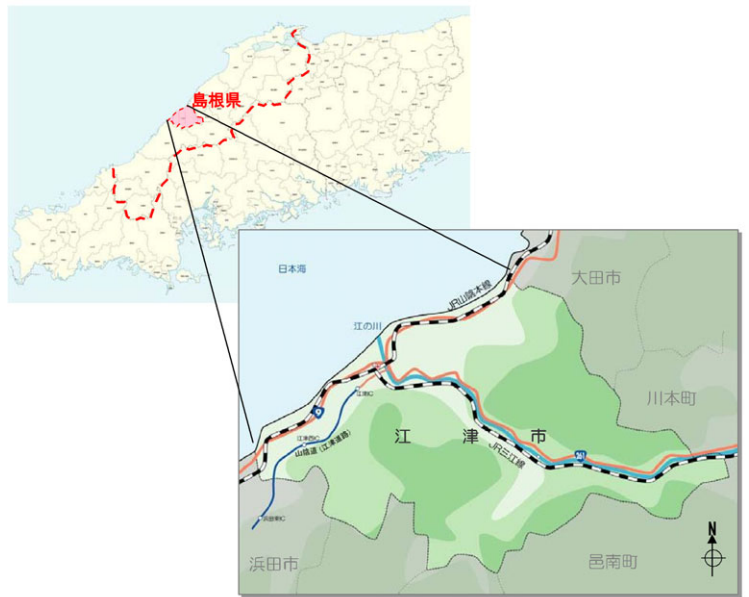
### ○石州赤瓦のまち ごうつ 江津

江津市は、島根県のほぼ中央部に位置する、人口約2万7千人、面積268.51km<sup>2</sup>のまちです。

市の中央を中国地方随一の大河である「江の川（中国太郎）」が南北に悠々と流れ、この河口を中心として市街地が広がり、製紙工場の立地と地場産業の窯業により工業都市として発展してきました。

南北朝時代の昔から山陽と山陰を結ぶ江の川の舟運要衝として、中世に入ると日本海の手運との結節点として栄え、江戸時代中期から明治期にかけて全盛を誇りました。また、万葉歌人で有名な柿本人麻呂ゆかりの地としても知られ、多くの歌や伝説も今に伝えられています。

本市は日本三大瓦産地の一つである石州瓦の生産を地場産業としています。赤瓦を代名詞とする石州瓦は、石見地方各地に存在する陶土に適した粘土（都野津層）を利用して、元和元年（1619年）



浜田城築城のための御用瓦として焼かれたのが始まりと云われています。そして、明治10年（1877年）頃から出雲地方で産出される来待石を原材料とした釉が本格的に使われ、釉薬瓦として製品化されたのが、現在の石州赤瓦の始まりとされています。釉薬の来待石に含まれる鉄などが1300度





の高温で焼成され還元作用によって現れる魅力的な赤系の色相を持っており、強度、耐久性、美観性、凍害性に優れた瓦として全国に流通しています。

本市では、石州赤瓦の伝統的な街並み景観がまとりとして今なお多数存在しており、江の川の舟運や北前船の海運による物流拠点となった町、石州赤瓦の主産地として栄えた町、北前船により北陸や東北地方にまで運ばれた「はんど」と呼ぶ「大型の水がめ」の積出港として賑わった町、浜田藩の代官所がおかれ、街道拠点として栄えた町や石見銀山へ至る街道沿いの町など、良質な赤瓦景観を残す集落が数多くあります。

石州赤瓦は島根県石見地方だけではなく、明治期より各地に運ばれ様々な地域で赤瓦の街並み景

観を形成していますが、赤瓦の景観が多く存在している地域は稀であり、本市の大きな特徴となっています。



## ○蘇る天領江津本町

幕府直轄地であった世界遺産の石見銀山。この幕府直轄地の西端、江の川の河口に位置する江津本町は、寛文年間より北前船の寄港地や天領米の積出港として栄え、川岸には4、50隻の帆船が林立し、浜田で入港を待合わせる船があるほどの混雑ぶりであったともいわれます。古代山陰道による「陸路」、北前船による「海路」、そして陰陽を結ぶ大動脈であった江の川の「河の路」などの交通の要所でもあり、当時は石見銀山に次ぐ石見地方第二の賑わいを見せ、幕末には長州軍が3年にわたり本陣を構えるなど深い歴史ももつ石州赤瓦の光り輝く天領の町でした。

しかし、大正9年の国鉄開通によりその繁栄も陰りを見せ始め、戦後には市役所を始めとして官公庁出先機関の移転等により、人口の空洞化が進み、古民家や空き家の解体などが顕著になり地域の活力が衰退すると共に地域の歴史や文化までが忘れ去られるような状況となっていました。

平成11年頃から地元建築士会や神奈川大学建築史研究室による街並み調査が行われ、繁栄の面影を色濃く残す江津本町の価値を広く市民が認識するところとなり、地区住民によるまちづくり協議会が組織されました。それまで誰も気付かなかった地域の価値を地域の資源として活かしたまちづくりができないか議論されるようにな



浜田藩との境界に建つ天領界標柱



古代山陰道の石畳がそのまま残る市道



りました。平成16年には「天領江津本町 薨街道」として国交省などが支援する夢街道ルネサンス認定地区となり、江津市においても住民活動を支援するかたちで平成19年度より街なみ環境整備事業に着手し、歴史的な建造物の保存活用や民間住宅の修景を進めるとともに、下水道整備の進捗にあわせた市道の美装化などを進めることとしました。



市道に残る鼻ぐり石

## ○薨（いらか）街道の命名

### —夢街道ルネサンスの目的—

少子高齢化や過疎化をはじめ様々な問題を抱える中国地方は、日本海・中国山地・瀬戸内海と変化に富んだ地域で構成され、由緒ある街道が数多く存在する地域でもあります。その街道沿いには豊かな歴史や文化・自然が豊富に残っており、夢街道ルネサンスは、これらの「財産」を再発見し街道を見直していくことで、地域が主体となってまちづくりを展開していけるように支援することが国交省中国地方整備局などが推進する夢街道ルネサンスの目的とされています。

夢街道ルネサンスの地区認定にあたり、まちづくりに関わる地域を総称する街道名を決める必要があり、地元のまちづくり協議会では次のような視点で街道名が決められました。現在ではこの地域を「江津本町」ではなく「薨街道」という名で呼ばれることが多くなり、愛称ともなっています。協議会では下記の事項に配慮し、街道名を命名されました。

(命名に際して配慮したポイント)

- ・本町地区住民に愛着を持たれる名称であること。

- ・市外県外住民に位置関係が容易に想像できる名称であること。
- ・地域固有の地名が入った名称であること。
- ・生活や文化に密着した名称であること。
- ・歴史的に謂れのある名称であること。
- ・簡単に呼べる名称であること。

### —協議会の街道名命名理由—

先人達の偉業を知り、地域の文化や歴史を見直すとともに、埋もれた文化と歴史も再発見し、地域の素晴らしさを未来へと伝え「好きと言える江津本町」「住み続けたい江津本町」を育てて行くことが現代に生きる私たちの使命です。

歴史と地域の重要性を物語る「天領」と、さらに当時より石州赤瓦の輝く町であり、現在においても全国的な知名度と生産量を誇る石州瓦の主産地である江津市の将来を瓦に託しながら「夢と瓦」の想いも込め、「薨」の文字を使った「天領江津本町薨街道」を地域のまちづくりにあたっての新たな街道名とし、この江津本町を保全し創造して行きたいと思えます。

(江津本町地区歴史的建造物を)  
活かしたまちづくり推進協議会

## ○街なみ環境整備事業

地域の歴史的な建造物などを保全・活用しながら、歴史と文化、そして水、緑、花などの要素を取り入れ住み良いまちづくりを目指し、また道路や小公園などの整備により定住促進や地域活性化に結び付け、地区民だけでなく全市民が誇れるようなまちを次世代に伝えることを目的に事業に着手しました。

道路は歴史的な建造物などとの景観的な調和を図るとともに各路線をネットワークし、歩くこと

に主眼を置いた整備を進めることとしています。整備のイメージは自然的な雰囲気を感じられる舗装材で美装化し、主要な路線は無電柱化も進めたいと考えています。

また、道路整備と合わせて住民のコミュニティの場、来訪者の休息の場として主要ポイントに小公園の整備も行い、道路の多面的機能をより高めたいと考えています。



道路美装化・無電柱化 イメージ



昨年度までに地域のシンボリック建築物でありながら老朽化し、未利用施設となっていた明治20年頃建築の旧江津郵便局と大正15年建築の旧江津町役場を改修しました。今年度からは古代山陰道であったと云われる市道の改修や小公園の整備を進める予定としており、10年の期間で計画的に事業を進めることとしています。

行政によるハード整備の一方、地域では若者たちによる道路空間や空き地などを活用した新たなイベントなどが頻繁に行われるようになりました。イベントには地区内外はもとより遠く市外からも多くの方々が薨街道を訪れるようになり、地域の歴史や文化も知っていただくことにも繋がっています。

住みやすいまち、或いは良いまちと評価される地域には、次のようにそれを構成する5つの特徴があるとされます。

1. 美しいまち
  - ・地域らしい街並み景観が整っている。
  - ・自慢や目印となる建物があり、歴史や文化に特徴がある。
2. 安らぐまち
  - ・自然が豊かで樹木や花などが大切にされている。
  - ・みんなが憩える公園や広場、川などがある。
3. 安全なまち
  - ・交通、防犯、防災などに対して安全に暮らせる。
4. 優しいまち
  - ・道路や通路が整備され、子どもから高齢者まで安心して歩ける。
5. 手をつなぐまち
  - ・地域の人々の交流や助け合いなどの支援活動が盛ん。

天領江津本町薨街道では、このような考え方に基づいたまちづくりを実現するため、市教育委員会とも連携しながら街なみ環境整備事業に取り組む、住民の日常生活に密着した道路整備も進めたいと考えています。



高校生による絵画講習会



活性化イベント 本町ふらり歩き



ガレージショップ